

Title	ライプニッツと歴史主義の問題
Sub Title	Leibniz and the problem of "Historicism"
Author	米田, 治(Yoneda, Osamu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.522- 541
JaLC DOI	
Abstract	In this article, I studied Leibniz from the point of view of "Historicism". An attempt to consider Leibniz in relation to "Historicism" is seen in Meinecke's, where "Historicism" is regarded as a sort of dynamic "Denk- weise". I insisted, in contrast to Cartesian school, the dynamic "Denkweise" in Leibniz's thought as Meinecke had once done. According to my interpretation, Leibniz's thought is of a dynamic "Denkweise" in its basic character, while that of Descartes belongs primarily to a static "Denkweise". Nevertheless Leibniz's thought cannot be fully understood merely from this dynamic point of view, for a kind of static "Denkweise", too, is prevailing in his thought. The problem, therefore, lies in how those two contradictory elements (dynamic and static "Denkweise") come to be united in Leibniz. I tried, here, to find this synthesis in his conception of "the Monad as the Metaphysical point" as well as in that of the "Infinity".
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0526

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ライプニッツと歴史主義の問題

米 田 治

近代の發端をヨーロッパ史上のどの時點に設定するかは、二十世紀の歴史學に課せられた最も重要な問題の一つであると言つてよい。それは、もはや近代とは異質的な時代に足を踏み入れつつある我々が、從來の近代主義的態度とは違つた何らかの形で—勿論近代主義を肯定するにせよ、又否定するにせよ—近代に對して一つの態度を表明し、一つの決斷を下そうとする苦悶と摸索のあらわれである。

その場合、ジルソンなどキリスト教的立場に立つ人々のように、近代の發端を從來より溯らせて十三世紀におくによ、又從來の如く十五世紀のイタリヤルネサンスにおくにせよ、又、マルクス主義者たちのように十七世紀の名譽革命におくならば尙更のこと、生活方法、世界觀の大きな轉換、特に形而上學的、キリスト教的世界觀から科學的、世俗的世界觀への決定的な轉換は、十七世紀から十八世紀にかけて行われたことは承認していいと思われ⁽¹⁾。それ故、フランスの文學史家P・アザールはこの時期を(一六八〇年から一七一五年まで)「ヨーロッパ精神の危機の時代」と特色づけ、この時點に一つの大きな轉換期を見出すのである⁽²⁾。キリスト教の後退と、精神的、政治的世俗化、かような現象から新しい感受性、思惟方法が生じたのだつた。

マイネツケもその大著「歴史主義の成立」において同様に、「十七世紀から十八世紀にかけての轉換期に、時を同じくしてイギリスとドイツと又イタリアにおいて、いくつかの思想が創造せられたことは銘記すべき事柄である。シャフツベリー、ライプニッツ及びヴィコーはそれぞれ獨自に、それぞれに獨特な個人的前提や環境から出發してこの世界をつくり上げた⁽³⁾、と書いている。そしてこの思想の世界が、後に歴史主義とよばれる精神現象となつたことは言うまでもない。この危機の時代の眞只中にライプニッツは生きた——彼の生涯は一六四六年から一七一六年まで——。それ故キリスト教の後退より生じたこの時期の新しい思想の多方面的な現われはライプニッツにも存して居り、その一がマイネツケの言う如き歴史主義であり、從來彼がデカルト的合理主義の系列に數えられながらも、それから區別される理由の一つは、歴史的意識であり、これがマイネツケをして、ライプニッツに歴史主義の成立を準備した思想家としての地位を賦與させた當のものであつた。そしてマイネツケが前記三名の思想家の登場を語るとき、デカルト主義を基調とするフランス合理主義の克服を言うのも、この故に外ならない。⁽⁴⁾ 本稿において取上げようとするのは、ライプニッツにおける歴史主義の問題であるが、先づこの兩者、デカルトとライプニッツの歴史に對する態度についての検討から入つて行きたい。

周知の如くデカルトは、學問即ち哲學を數學、自然學 (Physics) と形而上學の三つに限つた。

何故なら、彼によればこの三つの學問のみが確固たる認識に到達し得るものであつたから。そして詩、歴史、それに神學も——これは前記二つのものとは別の意味においてであるが——、學としての資格をもたぬものとされた。何故な

ら、詩は、訓練、勉學の成果よりもむしろ生れながらの詩的天賦が、詩的素質が問題なのであり、たとえ詩學を知らなくとも第一流の詩人たることを失わないし、又神學に關しては、宗教の啓示的眞理は人間の理解を超えたものであり、それは信仰に依據する問題であつて、學問的推論の彼方にあつたから。更に歴史も如何に興味深く且つ教訓的であり、人生に處する場合に有用であらうとも眞理たることを要求し得ぬ。この點についてデカルトは次の如く述べている。

「諸國語を學び、古い書物を讀むことに、又これらの書物が語る歴史や寓話 (fables) に、私は十分時間を費したと思つた。けだし他の世紀の人々と語ることは旅することと同じである。私どもの習俗を一そう健全に批判するためにも、又何事も見聞せずに過した人々がおち入り勝ちな、私どものやり方に反するものはすべて笑うべきもの、道理に背くものと考えてしまわぬためにも、諸國民の習俗について何ものかを知ることにはよいことである。しかし、旅行にあまり時を費しすぎれば自分の國にいて異國人となり、過去の世紀に行われたことにあまり好奇心を持ちすぎれば、現世紀に行われていることについて極めて無知なものになり勝ちである。のみならず寓話は、全くあり得ぬ事象をあたかも可能であるかの如く空想せしめるし、最も忠實な歴史でさえも、讀まれるための品位を高めようとして史實の價值を變えたり、加えたりすることはないにせよ、少くとも極めて些細な、物々しからぬ事情は殆んどいつも省いてしまう。そのために残る部分はあるがままに現れぬこととなり、それに範例を取つて私どもの習俗を改良しようとする人々が、私の本國の武者物語の主人公に見られるような途方もないことをし出かし、わが力量を超えた計畫を抱くに到るものである。」

この引用から、たとえデカルトが歴史の價值を感受しなかつたわけではないにせよ、彼の意圖する限りでは、彼の歴史に對する否定的態度は明白である。彼のかような否定的態度は、歴史的逃避主義、歴史の過去の敘述は信賴し得ぬと

する歴史的懷疑主義、歴史の非功用心、以上の三點に要約して指摘し得る。彼の歴史に對する否定的態度は、合理主義的哲學の代表者として、學問を數學的な嚴密科學に向けようとしていた彼にとつて當然であり、哲學と歴史の疎隔こそデカルト學派の大きな特色であつたと言わねばならない。⁽⁶⁾

それに反してライプニッツは如何であつたらうか。彼は早くからリヴィウス、タキトウスを始めとした多數の古代歴史家の著作にしたしみ、幼少の時から歴史に對する興味を抱いていた。ジャン・ギトンは、その鋭く透徹した洞察力で以つてライプニッツの幼時の母の手になる教育に觸れ、これが彼の歴史的感覺の培養に多大なるものがあつたことを指摘している。⁽⁷⁾ 即ちライプニッツは六才の時ライプツィヒ大學の道德哲學の教授であつた父を失い、母の手で育てられたが、この母は彼が自由に讀書するままに任せ、豊富な父の書庫に入り、手に書物を讀むがままにさせていた。これを、パスカルの父の嚴格にして意識的にパスカルを書物から遠ざけた教育法が、パスカルの思想の個性的且つ過去からの斷絶という特色に多大の影響をあたえことに比し、ライプニッツの思想の多方面性、包容性という特色、先行者の成果を肯定し、その上に立つて自らの學的成果をつけ加え、過去の成果を現在のそれ、自らのそれによつて伸ばし、高めて行くという彼の思想の特色——換言せば歴史的の方法の特色——が、かような幼時の教育に依據すること大なるをギトンはその著「パスカルとライプニッツ」において語つてゐることは極めて興味深い。そしてかく、早くから眼ざめた歴史的感覺は、後になつてもより高められて生きつゞけ、その生涯に互つて保持されつづけたことを知り得る。

彼は學生時代より従事したローマ法の研究において、法律研究の基盤を哲學的地盤に求めるとともに又歴史的地盤にも求めたこと、このことは、一六六七年末に起草せられ、翌年の初頭にマインツ侯に送られた論考「法律學を學び、且

つ教授するための新方法」(Methodus nova discendaedocendaequae Jurisprudentiae)において表明せられて⁽⁸⁾いる。そこにおいて彼は、歴史に法律學の補助學としての中心的役割を次のような形で賦與している。即ち、法律學を、論證し討論する實踐的實用的領域——法律を運用する技術的な、現在の用語で言えば法律の解釋學的領域——と、歴史との領域に分ち、更に後者を法律學内部の歴史(Historia interna Jurisprudentiae)——即ち法律學そのものの歴史——と、法律學外の歴史(Historia externa Jurisprudentiae)——即ち法律家が法律を理解し、運用するのに不可欠な知識を提供する歴史——とに分類し、歴史に學問的領域を設定した。そしてローマ法を理解せんがためのローマ史、教會法のための教會史、封建法のための中世史、現行法理解のための現代史と四つの部分を規定している。そしてそれぞれの時代の法律をそれぞれの時代の歴史と適合させ、結びつけて理解すべきことを言っている。それ故、かように把握せられた歴史は、彼にとつて單に狹義の法制史以上のものであつたと主張し得る。そして教會法の歴史研究について語つて、「教會法の個々の條項へと導いて行く歴史的背景を追求することは不可欠である。吾人は、予備的段階の歴史(Historia isagogica)にとどまり得ずして、立法の諸條件を明瞭ならしめる最内奥の、核心的歴史(Historia intima)に向わねばならぬ⁽⁹⁾。」と言ふとき、法律の背景にひそむ歴史の魅力と、その意味とを明瞭に把握していたと考へ得る。

我々は、若きライプニッツにおいて法律との關連から歴史を理解したが、これにつづく時代、マインツ侯に仕えていた時代にあつては——一六六八年から七二年まで——、歴史は實際政治との關連において示される。それは、プファルツ伯フリーリップ・ヴィルヘルム・フォン・ノイブルクをポーランド國王に即けんが爲に書かれた「ポーランド國王選舉

のための政治的論證」(Specimen demonstrationum politicarum pro eligendo Rege Polonorum)、『ドイツに對するフランスの銳鋒をそらさんが爲に、佛國王ルイ十四世にエジプト遠征を提議した有名な「エジプト献策」(Consilium Aegyptiacum) 等に見られ、統治術を政治的、宗教的、精神的諸體判との關連において把握せんと意圖せられている。

パリ時代(一六七二年より七六年まで)には、歴史への關心は一應哲學、數學研究の背後に退くが、それにも拘らず歴史への興味を保持しつづけた。文書館を歴訪しては種々の歴史上、政治上の資料を探索し、殊に王立圖書館に閉籠つて資料を調べることにも多大の喜びを見出している。この探索は同時代の歴史に對する興味を喚起し、フランソワ一世からルイ十三世までの歴史的に重要な人物を、この探索の結果得られた覺書、メモ、報告書を基として書き出そうと決心させた程であつた。⁽¹⁰⁾ 勿論このことは實行されなかつたが、歴史への關心の持續を讀み取るに十分である。しかし彼が歴史家として決定的な歩みを踏み出したのは一六七六年、ハノーヴァ侯の宮廷に職を得、そこに一七七九年、エルンスト・アウグスト侯の依屬によりヴェルフエン家の歴史を編纂する仕事に着手した時からである。この歴史編纂事業は、ライプニッツ自身の歴史に對する關心もさることながら、その意圖は純然たる宮廷的なものであつた。家運隆昌に向いつつあるヴェルフエン家——ハノーヴァ家はその家系に屬する——が、その發祥の由來を歴史的に明かにして自らの基礎を固めるとともに、選舉侯たるの資格を獲得せんと政治的意圖をもつものであつた。この歴史敘述(Annales imperii Occidentis Brunsvicensis) は彼の死の直前まで續けられたが、彼の時代にまで及ぼそうとした當初の計畫に反して一〇〇五年までしか到らず、遂に未完成に終つた。この歴史敘述は、ヴェルフエン家の起源を明らかにする

という所要の目的の爲の王侯の歴史、就中、ドイツとイタリヤにおける王侯の系譜的眺望という一面をもつが、彼の卓拔せる歴史感覺は、この歴史敘述を單なる宮廷的系譜の編年史にとどめていはしない。それは他面では *Geschichte von Land und Leuten* でもあり、この彼の學問的動機より出た要素は、ハノーヴァ侯の當初の意圖を超え、それに迎合することを拒否し、ヴェルフェン家の起源の歴史を更に廣く且つ深く *Land und Leuten* の上に定着し、人間の歴史を *Natur und Erdgeschichte* の基盤に設定しようとされている。その爲に地質學の對象たる岩層、地層、化石についての研究が考慮せられ、又最古の諸民族の形成や移動などを歴史的に把握するための補助手段として、言語學の果す役割さえも認めている。かように王侯に關する年代記的系譜の歴史よりもむしろ、純粹に學問的意圖で以つて普遍史關連をつくり上げ、謎に包まれた起源の問題に鋭く肉迫して行こうとする特色が、この歴史敘述において見出されねばならないのである。

以上述べて來たところから、ライプニッツにあつては生き生きとした歴史的感覺が目覺めていたことを認めるに十分であらう。しかし問題はこれにて盡きるのではない。私の意圖するところは歴史敘述家としてのライプニッツであるよりはむしろ、哲學者としてのライプニッツであり、彼の歴史敘述において見出される歴史的感覺が、彼の哲學的思想に如何に浸透しているか、一言で言うなら、彼の哲學と歴史との關係である。成程、彼は歷史上稀に見る天才であり、その活動領域が多岐に亙ること、彼の思想が非體系的、非完結的であること、彼の著作の大部分は、その都度その都度の機會に應じて書かれたものであつて、首尾一貫した意圖で貫徹せられていないこと、確かにその通りであるが、だから

と言つてそれは、彼の多方面的な知的活動領域がそれぞれに孤立して相互に何の關係も持たないこととは自ら異なるものである。

しかも當時歴史の敵手は、前述した如くデカルト學派をはじめとする新思想の代表者であり、彼らによれば、「歴史を讀んで事實を知るのではなく、各個人、各民族がその事實に對して下した解釋を讀むのであり、歴史とは始から終まで疑問符の連続であり、總體的に言うなら、永遠の懷疑主義である。」⁽¹¹⁾ それ故ライプニッツには、かような歴史的懷疑主義を前にして歴史の世界を學的に、理論的、哲學的に擁護し、再構成せんとする課題が存したのであり、——このことに關しては經驗的眞理の世界に *Probabilitätslogik* を適用し、蓋然的眞理の定立で以つて答えるのであるが——、この點よりしても彼の哲學と歴史との關係が考慮されなければならないし、又一個の個性的な思想家として、彼の歴史的感覺が——たとえ無意識的であらうとも——彼の哲學的思惟に入り込むのは當然であり、デカルト哲學の非歴史性に對して、ライプニッツ哲學の歴史性が想到されなければならない。それ故、ライプニッツが歴史を如何に評價し、又歴史の世界を哲學へ如何に秩序づけたかという問題、彼の哲學における歴史性の問題が提出されるのである。

ライプニッツ哲學における歴史の世界を問題とするとき、直ちに想起されることは、「永遠の眞理の世界」と「事實の眞理の世界」について彼の語るところである。マイネッケはこのことを「歴史主義の成立」⁽¹²⁾において次の如く言う。「ライプニッツにあつては永遠の眞理の世界が事實の眞理の世界の上位にあるものであり、」⁽¹³⁾「又彼は、この兩世界の並存的に働き合う (*nebeneinander*) 關係を觀たが、內的に關り合う (*ineinander*) 作用關係を觀なかつた。」⁽¹³⁾ しかしマイネッケのこの言は肯綮に當つているとは言い難い。更にマイネッケによれば、歴史の世界の發見は、「事實の眞理

の世界」が見出され、それが「永遠の眞理の世界」に對して優位を占めるとき生ずるものであり、ライプニッツにあつては後者即ち「永遠の眞理の世界」が、前者即ち「事實の眞理の世界」に對して優位をしめていた點に、ライプニッツの歴史主義に對する限界が存するとされる。そして次のようなライプニッツの言葉を引用する。「哲學者は古き事物の研究家 (Antiquar) を嘲笑し、後者は前者の夢物語を嘲笑する。⁽¹⁴⁾ 言うまでもなく前者、哲學者は、理性的、論理的、哲學的方法で以つて、「永遠の眞理の世界」を研究する研究家であり、これに反して後者は、事實的史料の蒐集をなし、それにより自然的な、「事實の眞理の世界」を経験的方法で以つて探究する研究家をさしている。それ故哲學者と Antiquar という二つの言葉で異つた二つの學問的態度、方法が示されている。だがライプニッツは何れか一方を目して他よりも重しとしたのではなく、二つながら彼にとつて本質的であり、この兩者を統一せんと欲したのだつた。⁽¹⁶⁾ 蒐集家的、經驗的方法を以つてする Antiquar の概念は、Historiker の概念と同一ではなく、後者は前者より廣く且つ深い。ライプニッツの言う Historiker とは、antiquarisch な研究の成果の上に立ち、歴史的懷疑主義を克服し、歴史の信頼性を獲得し、歴史認識へと浸透して行くことを義務づけられた人のことであり、antiquarisch な資料蒐集家と哲學的な Denker とが一致してこそ、歴史的眞理に到達し得るのである。彼はそれ故にこそ經驗的領域における知的努力に倦むことなく、人間の洞察力にあたえられている限界内において眞理の最高の段階にまで到達せんが爲の方法を求めて行つた。「眞理とはつねにイデーとの一致不一致とに存する。……何故なら、我々は實驗的にしか眞理を知り得ないよ⁽¹⁷⁾うな場合、かくして得られた認識の適切なるや不適切なるやは少しも知らない」との彼の言も、永遠の眞理に依據するイデーと、事實の眞理に依據する經驗、實驗との關連において彼の哲學が理解されねばならぬことを示している。

又このことは、「事實の眞理の世界」についての判断を、「永遠の眞理の世界」を洞察するために要請せられる理性と結びつけること、歴史的な「事實の眞理の世界」たる偶然性の領域へと、傳統的に理性の眞理のための方法として承認せられたる論理學、哲學を適用し、かような適用により歴史を嚴密なる學問の領域から排除しようとした當時の歴史的懷疑主義者から歴史の眞理の可能性を辨護しようとするものであつた。しかしかような適用による歴史的懷疑主義の克服と歴史的眞理の可能性の問題に關しては、本稿の所期している問題の範圍の外にあるものであり、又本稿にて部分的に取上げるにはあまりにも尨大すぎる故、この程度にとどめよう。とにかく、今ここで追求しているものは、「永遠の眞理の世界」と「事實の眞理の世界」との結びつきであり、この結びつきは、ライプニッツにおいては分つべからざるものであるということであつた。それ故、マイネッケの如くこの二つを區別して、「事實の眞理の世界」にのみ歴史の世界を觀ることは、不當ではないかと思われる。

前述したところで、いささか暗示せられていたのであるが、次にライプニッツにあつては、歴史とは何を意味するかを問はう。「歴史とは、感覺(sensus)によつて構成せられた個別的なもの(singulares)、偶然的なもの(contingentes)について命題である。⁽¹⁸⁾」これによれば、歴史とは自然科学を含めた經驗科學總體を包括する「事實の眞理の世界」における諸現象に適用され得る全體概念となる。更に歴史についてのより詳細な概念は、「人間悟性新論」において觀られる。即ち「現に存在する世界(existierenden Welt)について重要なのは、かように創造せられ、別様には創造せられなかつた實有(être od. Wesen)の事實的 Existence であり、これが事實的所與又は歴史である。⁽¹⁹⁾」この意味に

において歴史とは神の創造の總體内容として神の創造によつて、イデーがその可能性から事實的な一回限りの Existence にもたらされたものとして把握されている。かように把握された歴史の内容は、現在の用語法で言えば、 Natur = Geisteswissenschaft に包攝されるものすべてを含むこととなる。そしてこの歴史の世界は、多少の差はあるにせよ大略、前記の事實の眞理の世界と同一視して差支えないように思われる。この事實の眞理の世界としての歴史の世界、これを今少しく觀て行こう。

ライプニッツが、歴史の世界を事實的所與の世界としての「事實の眞理の世界」——これを「永遠の眞理の世界」との關連においてとらえねばならぬことは前述した如くであるが——となすにしても、歴史を排除したデカルトにおける事實的所與と世界とは、極めて異つたものであることは當然であらねばならぬ。この差違は、事實的所與の世界を基礎づける哲學的根本前提たる實體概念の差違に求め得ると思われる。デカルトにあつては、實體 (Substance) は、——無限實體である神を除外すれば——、思惟實體である精神と、延長實體である物體とであり、この兩者によつて構成される有限の世界——即ちライプニッツの言う事實的所與の世界であるが——に歴史なる概念を導出することはできない。何故なら、思惟實體である精神は、人間の不變的本性として把握されているからであり、又延長實體である物體は、延長、即ち擴がりであることを喪失すればその存在を失う故、延長という屬性の變化することが予想せられていないからである。一言で言えば、デカルトの實體觀は極めて靜的 (static) であり、何らかの形で時間と變化とを予想する歴史の概念から極めて隔つてゐる。勿論デカルトの哲學にも運動概念は存在し得るが、それは空間的運動であつて、時

間的運動ではない。

それに反してライプニッツにあつては、實體とは「力」(Kraft)であり、力である限りにおいてのみ主體 (Subjekt) なのである。換言するなら、實體は直接的に活動し、作用するものであり、その活動、その作用の系列においてのみ自らの本性を示顯するものである。⁽²¹⁾ そしてかかる力の概念には時間という契機が不可缺である。⁽²²⁾ それ故、デカルトの自然観察の意圖するところは、運動を靜的な、空間的關係に換元して説明することであり、彼が、平面的な座標關係に抽象して説明する解析幾何學の創始者であつたことも、決して偶然ではないのである。だがライプニッツの場合、時間的關係が本質的なものとなつて現れる。かくて時間概念が導入せられ、「事實の眞理の世界」に動的性格が賦與せられ、時間的運動がこの世界の基本的性格となる。即ち「事實の眞理の世界」は、歴史的性格を帯びてくる。

「事實の眞理の世界」のダイナミズム化、それは、彼にとつて歴史敘述の核心的問題であつた「起源」(Ursprung od. Origines) の問題でもあつた。彼は「歴史についての附録」(Accessiones historicae) の序文において次の如く述べている。「我々は歴史から次の三つのことを期待している。即ち特殊なるもの (res singulares) を知らうとする知的欲求、生活に役立つ教訓、現在事物をその起源から因果的に導出すること、この三つである。⁽²³⁾」更に「人間悟性新論」によれば、「歴史の効用は、主として事物の起源を認識する喜びに存している。⁽²⁴⁾」この歴史的起源の問題は、當然諸事物の時間的生成發展と、その發展の因果系列を前提とする。例えば、一六九三年にその概略が發表された「地球前史」(Protogaea) は、地理學、地質學及び低ザクセン地方の人間の最古の遺物について論じたもので、前述した彼の歴史の名著、*Annales imperii Occidentis Brunsvicensis* の序説的役割を果している。⁽²⁵⁾ それ故この著作は、宇宙及び

地球についての前提から人類史を説き起そうと試みたヘルダーの企圖、「人類歴史の哲學のためのイデー」(Idee zur Philosophie der Geschichte der Menschheit)に對する一種の前奏曲であり、ライプニッツが、時間的發展、連續性の原理において事物を觀察せんとした歴史的態度を有していたことを窺い得る。

そして又これは彼の哲學の原理でもあつた。即ち實體は閉鎖的存在ではなく、又その本性は、自己完結性に存するのでもなくして、未來に向つて開かれてゐる開放性に存し、實體の存在形態は、その展開、發展の中にあらわれる。「實體の本性は進歩もしくは變化を必然的に要求し、又それらを本質的に内に藏している。そしてもしそれがなければ、實體は作用する力を有することが不可能となる。」⁽²⁶⁾ それ故、ある一つの實體が考察せられる場合、時間的展開途上の一點において觀られねばならず、「實體においては、現在の状態は、何れもそれに先立つ状態から出て來た歸結であり、從つてそこでは、現在は未來を孕んでいる。」⁽²⁷⁾ そしてこの實體の發展は無限運動であり、決して終極に達しないものなのである。これを以つてしても彼の實體觀、彼の哲學の歴史的、動的性格を知るに十分であらう。ライプニッツ哲學におけるこの部分が、ドイツ精神史の系列においてレッシングからヘルダーへと續き、動的、歴史的世界に對する感覺の目覺めとなつて爆發したことは、カツシラーの詳細な研究が論證するところである。⁽²⁸⁾

以上、彼の哲學の實體は極めて動的なものであつた。がそれは經驗的な「事實の眞理の世界」に適用し得るものであつて、「永遠の眞理の世界」に適用し得るものではなかつた。何故なら、「永遠の眞理の世界」即ち「理性的眞理の世界」は「別に獨立した存在で、それ自身で以つて足り……永續的、恒常且つ絶對的であつて、」⁽²⁹⁾ 「特別の法則を持ち、物質の蒙むる變化を超越している」⁽³⁰⁾ からである。

だが、かような經驗的な事實の眞理の世界に賦與されている *Dynamik* 發展、この動相のあり方は如何であらうか。それは、後世、十九世紀の歴史觀が暗黙の了解の下に含蓄せしめられている自由とか創造性の要素を包括している發展とは程遠い。

實體の本性は自己完結性ではなく、未來に對する開放性にあり、その本性を發展の中に示顯するものであることは前述した。しかしこの發展は實體の自由なる創造ではなく、實體がその發展において示顯するものは、予め完全に規定せられてゐる。「實際、實體には、それについて起るすべてのこと、即ちそれが持つあらゆる現象、表出を、……他のものの助をかりることなく、順を追つて、自動人形の如く産出することのできる本性、即ち内的力があたえられている。」⁽³¹⁾ それ故、「……すべての個々の魂は一つの世界として、神を除く他のすべてのものから隔絶し、獨立してゐるのであり……自らの實體の内部に、將來自らについて起るあらゆる痕跡を保有している。」そして又これが、彼の哲學の根本的方法として保持されていた連續律の原理と結びつく。「何事も唐突には決して生じない。そして私が連續律とよんでゐるところの『自然は決して飛躍せず』⁽³²⁾ という言、これは、……私の偉大な *Maxim* の一つである。萬物はその本性上段階を追つて行き、飛躍によつて進行しない」のである。發展とは、實體がその内部に可能性としてあたえられてゐる萌芽を開示すること、その開示のし方は、その萌芽においてすべて規定されてゐることであり、因果的連鎖による事象の考察方法を一面的に徹底化した決定論であり、自由創造による發展とは全く異なるものである。その實例として、「アレキサンダーが、マケドニヤ國王となり、大帝國を建設し、早死するということは、アレキサンダーという個體概念と結びついている」⁽³³⁾ と言う。それ故、「現在は過去を擔い、未來を孕んでゐる」⁽³⁴⁾ との彼の有名な言も、現在の創造性から

理解さるべきではなく、過去よりする現在、未來に對する規定性として理解さるべきものである。

何れにせよ、彼の動的なるもの、歴史的なるものについての感覺は、彼の時代の危機意識、時代が大きく轉換せんとしている狀況についての意識と關係を有していた。歴史的意識が變化、變革についての意識、動的なる感覺とするなら、時代の轉換期に顯著に現われるものだからである。ライプニッツは、時代の危機的様相を洞察していた。彼は、「ヨーロッパ全體に日ましに増大し行く野蠻人たちの大なる氾濫、あらゆる權威、あらゆる政治上の體制が、公共の安寧を破壊、攪亂し、同時に精神的なる人々をも破壊する野蠻なる軍隊の手に歸することによつて成立する一種の *Crisis*、又は一撃の下に *Atlantid* の大陸を呑込んでしまう大地震、大洪水にも似た一大變化」について語り、又「世界を脅威する大革命の到來」の予感について語る。このような彼の時代の危機は、彼によれば、個別的な、個々の國家の權力の増大がヨーロッパの秩序を崩壊させて來たこと、もう一つ、無神論の増大が社會秩序を無政府状態にもたらし、この二つの由來するものであり、かような無政府状態を促進するものとして、自由思想家達 (*les libertins*) の空虚な倫理思想を非難する。そしてかような秩序の崩壊が革命となるのである。このような危機意識は、彼の哲學の動的なる部分と何らかの結びつきを有していると考えられる。

だが彼は、「よりよく跳ばんがために退く」という有名な言葉の意味において、革命の淨化作用を確信し、革命によつて完成への世界史の過程は再三中斷するにせよ、その革命は終極的な崩壊ではなく、更にそれを超えた完成へと導かれて行くものであることを信ずる。歴史における革命と完成との關係は、絶えず高まり行く螺旋形という表現で示され

ている。⁽³²⁾ この歴史における完成という點に關して、「永遠の眞理の世界」が「事實の眞理の世界」と關係をもつてくる。何故なら、「事實の眞理の世界」のみから完成の概念を導出することは困難だからである。

この完成思想についてライプニッツの語るところを取上げて見るなら、「あらゆる現象は、人間の歴史において法則的に循環するものではなく、ある目的へ向つての、神の世界計畫の完成に向つての永遠の進歩の過程にあり、」⁽³³⁾ 又「事物の根本的起源」という論考において、美と神の計畫の普遍的完全性への進歩について語り、「文化 (Cultura) は、地上の大部分において受け容れられ、勿論、時々世界のある部分が再び野蠻になり、もしくは破壊され傷められることもあるが、……これは、……その破壊なり墮落なりが何か立派な結果を生ずるに役立ち、いはば損失によつて却つて利益を得るものだ」という意味に取らねばならない」⁽³⁴⁾ と語つている。だが彼の完成思想もフランス啓蒙思想のそれとに程遠く、キリスト教的地盤の上に立つものであり、「世界がパラダイスの状態に達するであらう」⁽⁴⁰⁾ との歸結を拒否し、反つてそれは、完成への無限の運動であり、それ故、進歩への終末には決して到達せず、かくて世界史の完成過程は、無限を計算する微積分學と同様のものと看做される。

彼のこの「完成」なる概念において、「永遠の眞理の世界」と「事實の眞理の世界」とが結びつく。完成とは「永遠の眞理の世界」、「理性的精神の王國」への到達であるが、それは、「事實の眞理の世界」にとつて無限の彼方の完成である故、現實的、經驗的には到達し得ぬ。それ故、その意味においては、「事實の眞理の世界」は「永遠の眞理の世界」から一應區別せられる。だが前者に對する後者の意味賦與の觀點よりすれば、兩者は形而上學的に結びつく。彼が、實體即ち力となして、實體から延長という經驗的、感覺的屬性を奪い、モナドという形而上學的點に存在の基點を求めた

のも、モナドをして前述の二つの世界をつなぐ媒介の役割を果さしめんとする意圖であつたと考えられる。又彼が思惟の二大原理として矛盾律の外に理由律を提出するの⁽⁴²⁾も、矛盾律にては不十分である兩世界の統合を、理由律で以つてなそうとするものであつた。

彼は兩世界の結びつきをなし得たと信じた⁽⁴³⁾が、何れにせよ、この兩世界の關係を看過しては、彼の思想の核心を逸するであらう。前述した彼の決定論もこの結びつきという點よりせれば、首肯され得ないものではない。それ故、「事實の眞理の世界」である「人類の歴史は、多くの繰返されたる轉換點をもち、悪しき方向に向うように見え、時として退歩することもあるが、それは、次に前方へと力強き歩みを向けんが爲である⁽⁴⁴⁾」と彼は語り得るのである。

冒頭に述べた如く、十七世紀末から十八世紀にかけての危機の時代において、キリスト教の衰退から生じた新しい精神的運動が歴史主義となつて行つた。ライプニッツもこの運動に參與した故、歴史主義に少からぬ寄與をなした。しかし彼は、この新しい精神運動に進んで身を投じ、積極的にこれを推進して行つた人達とはやや異つて、彼らに對する批判的立場を保持していた。それが彼をして「永遠の眞理の世界」をあくまで維持せしめた理由であり、近代精神の行きつくところについての憂慮と批判があつたのではなからうか。「私は人に劣らず近世の學者の價値を正當に認めたい氣持でいる。しかし近世の學者は改革をやり過ぎたのではなからうか⁽⁴⁵⁾」との彼の言葉も、この見地から私は受取つて見たい。あまりにも機械論的すぎる彼の同時代のデカルト主義者に向けられたこの言葉も、あまりにも近代的すぎるものになつて行つた歴史主義に對する批判としても妥當するのではなからうか。

彼自身極めて近代精神を、合理主義的思惟方法を身につけた人物でありつつ、尙これに批判的な一線を劃した點、こ

の點をばつても今日傾聴し、攝取せねばならぬもの少しとなつて考えられるのである。

註

- (1) Brinton, C., The Shaping of modern mind, 1953, p. 21.
- (2) Hazard, P., La crise de la conscience européenne, 1935. Meyer, R. W., Leibniz and the seventeenth century nevolution, 1952. ゆゑの危機意識の顯現たるハイテンションをいふべきである。
- (3) Meinecke, F., Die Entstehung des Historismus, I. S. 15.
- (4) Ibid., S. 15.
- (5) Oeuvres Choisis de Descartes, Classique Garnier, p. 6.
- (6) Collingwood, R. G., The Idea of History, 1956, p. 56.
- (7) Guittou, J., Pascal et Leibniz, 1951, p. 13~14.
- (8) Conze, Werner, Leibniz als Historiker, 1946, S. 4~5.
- (9) Ibid., S. 5~6.
- (10) Ibid., S. 7.
- (11) Hazard, P., La Crise. p. 36.
- (12) (註) Meinecke, Historismus, S. 40.
- (13) Ibid., S. 35.
- (14) Ibid., S. 35.
- (15) Die philosophische Schriften von G. W. Leibniz, herausg von Gerharat, (邦訳 G. W. 監修) III, S. 270.
- (16) G. III, S. 270.
- (17) Conze, Leibniz als Historiker, S. 35.
- (18) Ibid., S. 37.
- (19) G. V, S. 279.

- (20) Système nouveaux de la nature et de la communication des substance, aussi bien que de l'union qu'il y a entre l'ameet le corp, (Systeme ニ對シテ) G. IV, p. 478.
- (21) Cassirer, E., Die Philosophie der Aufklärung, 1936, S. 306.
- (22) 永井博著、ライプニッツ研究、筑摩書房、一一〇頁
- (23) Conze, S. 58.
- (24) Nouveaux essais sur l'entendement humain, (ニ對シテ) Nouveaux essais ニ對シテ) G. V. S. 452.
- (25) Meinecke, Historismus, S. 40~41.
- (26) Système, G. IV, p. 485.
- (27) Monadologie, G. IV, 610.
- (28) Cassirer, E., Freiheit und Form, 1922, S. 180. ニ對シテ
- (29) Système, G. IV, p. 485~486.
- (30) Ibid, G. IV, p. 479.
- (31) Ibid, G. IV, p. 485.
- (32) Nouveaux essais, G. V, p. 222.
- (33) Discour de la metaphysique, G. IV, p. 433.
- (34) Monadologie, G. VI, p. 610.
- (35) Preceptes pour avancer les sciences, G. VII, p. 162.
- (36) Nouveaux essais, G. V, p. 444.
- (37) Conze, S. 46.
- (38) Ibid, S. 47.
- (39) De rerum originatione radicali, G. VII, p. 308.

- (40) Ibid., p. 308.
- (41) Système, G. IV, p. 482.
- (42) Monadologie, G. VI, p. 612.
- (43) Ibid., G. VI, p. 621, 622, 623.
- (44) De rerum origine radicali, G. VII, p. 308.
- (45) Système, G. IV, p. 481~482.